



TITLE:

新館建築中の閲覧業務

AUTHOR(S):

井狩, らく子

CITATION:

井狩, らく子. 新館建築中の閲覧業務. 静脩 1999, 臨時増刊号(1999)100周年記念: 20-21

ISSUE DATE:

1999-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/37850>

RIGHT:

柄や、これに携わった人々の熱気が凝縮されていることがわかる。新館建設に関ったものには、一読あの日々が甦る美しい文章である。

京都大学附属図書館の新営は旧館の取り壊し、現地建替えと言う厳しい条件のもとに行われた。旧館を残したままでは、資格面積から旧館分を差し引いた、比較的小規模な新館しか建設出来ないことから、将来を見通し、あえて選択した厳しい道であった。建物の取り壊しから新館の完成迄のほぼ3年にわたる期間、利用者の不便を最小に止めることを至上命令として、約50万冊の蔵書の殆ど全てを利用可能な状態で学内各所に仮移転すること、開架図書室は改装した法経第一教室に移し、一週間以内に再開すること等々が求められた。この無理難題とも見えた課題も全職員の「火事場の超能力？」と、学内各部局のバック・アップによって、無事乗り越える事が出来た。次々に困難な場面に遭遇

した職員が、日常業務では隠されていた能力を発揮し、緻密さが要求される事には緻密に、素早く対応すべき事には素早く対応する様を目の当たりにする、驚きと感動の日々であった。学内の所々・方々に分散・移転した図書を、日に2回集配する職員が、雨の日、我が身は濡らしても本は濡らさぬようしっかりと抱え、傘を傾けて歩いていた姿にこの日々が象徴されている。

昭和59年3月、卒業式当日、一度も新図書館を使うことなく、仮の閲覧室で不自由な思いをさせた卒業生に、お詫びの意をこめ、新図書館を開放した。御両親共々館内を回り、思い思いに記念撮影をする人々の中に、退館する際「こんな図書館が出来るのだったら、留年すればよかった」ともらした卒業生があった。新図書館に対する最高の賛辞であった。

(かない たかし：元附属図書館閲覧課長

現流通経済大学図書館図書課長)

新館建築中の閲覧業務

井 狩 らく子

附属図書館閲覧業務100周年を迎えられ、おめでとうございます。

昭和55(1980)年7月附属図書館新営の概算要求が提出され、10月予算内示、翌年正式決定という大転換期の昭和55年5月、私は閲覧課閲覧貸付掛長を命ぜられました。以来、新営図書館業務の機械化等様々な経験をさせていただきました事に改めて感慨を深くしております。

程なく、職員の新営と、仮移転のワーキンググループが発足し、私は後者に属し、昭和56年8月1日から9月にかけて、その後の114日間の仮移転作業実施の為の計画・準備が始まりました。

閲覧貸付掛の最大の課題は、閲覧室と、利用可能な資料の移動計画等でした。

開架閲覧室は法経第一教室に決定しました。閲覧席200席、開架図書約2万8千冊(参考図書8千冊：参考掛)の書架設置、その他の移動

計画・準備が必要でした。古き良き時代の机と椅子は残念乍ら撤去され、決してすわり心持が良いとは云えない机・椅子が設置されました。開館してみると、9時前から学生は待っていてくれ、お互いに不自由を忍んでの利用だったと思いますが、日常的に満席でした。

利用対象の資料として、本館書庫の約27万冊の図書・雑誌の移動が当掛の担当でした。過去の利用統計から、利用率の高いものは法経新館地下書庫へ、漢籍関係は東洋学文献センターへ、利用率の低い資料は旧書庫等へと配架する為の結束準備、出口と配架先の棚番張り、配架後の点検等、猛暑の中連日行われました。ほぼ過不足なく配架は完了しました。利用可能な書庫内図書の利用は、1日2回対応していました。雨の日も、風の日も、冬の雪降る日もリヤカーにボテを積んでの作業でした。特に製本雑誌の利用が多い時、担当者は大変でした。経済学部

閲覧掛の皆さんには、電話の取り継ぎ、図書館職員の出入り等色々御協力いただきました。東洋学文献センターに配架した図書の利用はセンターの方に直接対応していただく事が出来たので、利用者共々大助かりでした。

昭和56（1981）年12月図書館新営の入札が終了し、翌年1月解体が始まると、新営図書館の為の計画・準備が本格化しました。閲覧貸付掛では新図書館の閲覧スペースに図書8万冊、座席800席の備品の計画、サービス集中化に伴うカウンターと、カウンター周辺の設計、ラウンジ等の備品の計画 etc. 特にカウンターについては、ワーキンググループ、施設部との間で、機能性をとるか、見た目をとるかで激しいやりとりがあり、現在の姿になっています。

新営の基本構想の重点課題であった機械化への準備も急がねばなりませんでした。貸出・返却を機械化する為、図書にID番号を貼り、対応する図書の書誌情報を入力しなければなりません。開架予定図書5万冊の図書カードをコピーし、それに掛員全員毎日超勤によって必要事項を記入しました。これを基に書誌情報の調整を行なう為、和・洋の目録掛と何度も何度も打合せを行ないました。更に、全面開放に近いサービスを提供する為、Book Detection Systemが採

用されました。図書にタトルテープを装備し、一方全学生・全院生（約2万名分）の利用者証を作成しました。作成に当っては、学術情報掛が担当して下さいましたが、図書IDの貼り付けや利用証の点検等は当掛で行わねばなりません。

こうして、昭和59（1984）年4月開館の運びとなりました。全学学生の利用者証の発行にも並々ならぬ神経を使わねばなりませんでした。入館機も開館当初は色々問題が起り、担当者はその都度走らねばなりませんでした。新営開館第一日も夢の様に過ぎました。

昭和60（1985）年私は和漢書目録掛へ配置換になりました。全国目録情報のネットワーク化が開始されたところでしたので、ここでも目録の電算化について勉強が必要でした。

思えば、これらの事はもう15～20年も前の事になりました。もっと大変で、大切だった事も抜けているでしょう。当時共に仕事をした図書館員の皆様はじめ、御協力いただいた部局の皆様に改めて、心より御礼申し上げます。そしてこの機会を与えて下さった事に感謝いたしております。図書館のますますの御発展を祈念申し上げます。

（いかり らくこ：元附属図書館総務課専門員）



新館建築中、法経第一教室が仮閲覧室となり、常に満席の状態であった。